

文化財調査報告書

調査日：平成 25 年 11 月 26 日

調査委員：鈴木 通大

石崎 武志

葛西 広子

1. 種 別 有形民俗文化財
2. 名 称 農村生活用具
3. 員 数 一括
4. 所在の場所 千葉県立多古高等学校
5. 所有者の氏名 千葉県（千葉県立多古高等学校）
6. 所 見

昭和 30 年代後半頃から急速に滅失しはじめた衣食住、農耕、運搬、信仰などに関する民俗資料（民具）が収集され、約 180 点が昭和 41 年（1966）に県指定有形民俗文化財となった。現在、その後、収集された民俗資料とともに一括の資料群として約 230 点が収蔵されている。これらの資料群は体系的に収集されているので、昭和 30 年代当時の農村生活を知る上で、貴重な民具である。

○資料館の環境について

多古高等学校の民俗資料館内の温湿度測定を、9 月 26 日から 11 月 26 日までの 2 ヶ月間、温湿度データロガー（オンセット社製、Hobo pro V2）を用いて測定した。測定した結果を図 1 に示す。温度の値は、最高 30℃から最低 8℃の範囲で、変化している。また、湿度は、70%から 85%の間で変化している。一般に、博物館資料の環境として、湿度の範囲として、55%～65%の範囲が推奨されており、現状の湿度では、カビや文化財害虫の発生の危険性のある範囲にあり、十分な注意が必要である。なお、この温湿度データロガーで、今後 1 年間継続測定する予定である。

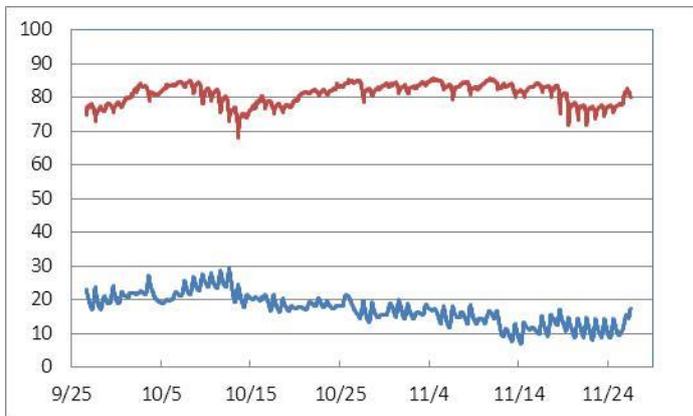


図 1. 民俗資料館内の温湿度（9 月 26 日～11 月 26 日）

○害虫・カビについて

目視点検においては、特に、害虫の発生やカビの発生等は見られなかった。ただ、スチール製の収納棚の上に、木くずと思われるものが見られたので、これが虫害によるものかどうか、一度、スチール製の収納棚の表面を清掃し、今後の経過観察をすることにより、これが虫害によるものと判断されれば、そのものを隔離するなどの処置を

することが必要であると考えます。また、現在、虫害対策として、IPM（総合的有害生物管理）という考え方が主流になっている。ここでは、次の 5 段階の方法で対策

を進めている。①回避 (Avoid) 虫・カビを寄せ付けない効果的な清掃とクリーニング、②遮断 (Block) 害虫やネズミが侵入するルートの遮断、③発見 (Detect) 早期発見が重要、またその記載は不可欠である。④対処 (Respond) 収蔵品に安全な方法を採用。⑤復帰 (Recover/Treat) 安全な収蔵空間に作品を戻して復帰、となっている。多古高等学校の民俗資料館に関しては、1 番目に上げられている清掃とクリーニングがまず重要であると考えられる。

○紫外線

外光に関しては、窓から直接紫外線が入る状態になっているため、紫外線の影響を受け収蔵物の劣化の進行が懸念されるため、紫外線が入るのを妨げる、紫外線防止フィルムを窓に貼るか、以前に指摘されているように、窓に、カーテンを取り付けるかなどの対策が必要であると考えられる。この点については、すでに平成 16 年 9 月 6 日の文化財調査でも指摘されているが、いまだに改善されていない。一方で、防犯上は問題なく、資料群は概ね良好な状態にあるので、今後、これ以上、資料等の褪色が進まないように留意すべきである。

○資料整理

資料点数が曖昧であることがあげられる。このことは、おそらく指定当時、「農村生活用具」一括として指定されたことから、「資料目録」があるにもかかわらず、内訳点数が正確におさえられていなかったことにある。したがって、資料の有無と点数の確認作業をし、正確な資料目録 (資料台帳) を作成することによって、資料と目録を対照できるようにすることが急務である。

ついで、各資料についての属性データを基本台帳 (資料カード) に記載し、完備することである。データは、現在、資料に一点一点に付けられている「資料札」(題箋) に資料名などとともに記載されているが、この資料札の一部が日焼けで劣化し、それらは字が消失しかけており、判読が難しくなっている。

○資料の公開について

農村地域の貴重な生活用具が展示されており、当時の農家の生活や苦勞を感じる事ができる。資料によっては、写真が添えられており、当時の様子が理解できる。また、当時の新聞の切り抜きや用具に関係する文書等も掲示され、貴重な資料と思われる。

本資料館は、多古高校のホームページや多古町の広報で紹介されているが、最近では、資料館を活用する小学校等はないということなので、学校、関係市町村と協力して、有効な活用を検討してほしい。

7. その他参考にすべき事項

<参考資料>

博物館の温湿度環境

クリモグラフ

年間を通した外気の温湿度変化の特徴は、縦軸に月平均湿度、横軸に月平均気温を取り、その地域のデータをプロットしたクリモグラフにより把握することができる。図に東京、奈良、パリのクリモグラフを示す。温度、湿度が共に高い環境条件では、カビが発生しやすく、図にはこの領域を示している。東京、奈良は、6月から9月に

かけて、温度も湿度も高く、カビが発生しやすい条件となっている。一方、パリのクリモグラフを見ると、温度の高い夏は湿度が低くなっていて、年間を通してカビが発生しにくい条件となっている。そのため日本の外気の温湿度条件は、文化財の保存にとって、とても厳しいものになっているのが分かる。

表 1. 材質に応じた温湿度条件

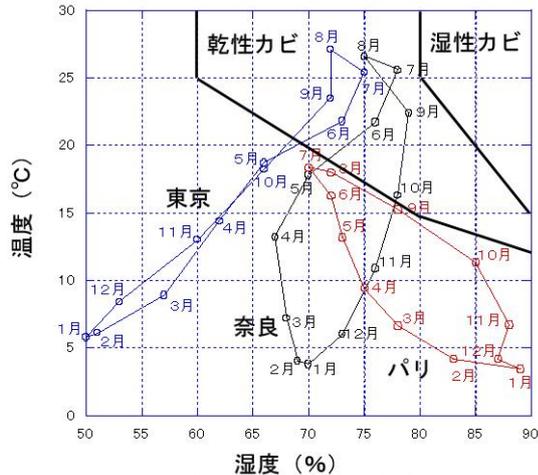


図 2. クリモグラフ (東京、奈良、パリ)

a. 温度	
約 20℃ (人間にとって快適な温度)	
フィルムについては、黑白フィルム 15℃、カラーフィルム 2℃ (ISO 規格)	
b. 湿度 (相対湿度)	
高湿度	100% 出土遺物 (保存処置前のもの) - 防霉処置が必要
中湿度	55-65% 紙・木・染織品・漆
	50-65% 象牙・皮・羊皮紙・自然史関係の資料
料	50-55% 油絵
	45-55% 化石
低湿度	

資料を扱う際の温湿度の基準

文化財を展示・収蔵する際に、湿度が高ければ紙や皮革などの有機物資料にカビが発生する。一方湿度が低ければ、木造彫刻にひび割れが発生したり、絵画の顔料が剥落するなどの問題が生ずる。そのため、I COM (国際博物館会議) や I I C (国際文化財保存学会) などでは、文化財の保存のための温湿度基準を対象の材質や状態によって表 1 の様に定めている。ただし、文化財資料は、様々な材料の複合体である場合が多いので、比較的環境条件の影響を受け劣化しやすいものの環境条件をもとに、博物館の展示・収蔵環境としては 55~65% 程度の範囲内にあることが望ましいとされている。



収蔵状況



収蔵状況



資料



収蔵状況